

アッガンニャ経の神話的食物の名 lasA / rasA / rasa

岡野, 潔

九州大学大学院人文科学研究院 : 教授 : インド哲学史

<http://hdl.handle.net/2324/17848>

出版情報 : 印度学仏教学研究. 52 (2), pp.858-851, 2004-03. 日本印度学仏教学会
バージョン :
権利関係 :



アッガンニヤ経の神話的食物の名 *lasā / rasā / rasa*

岡 野 潔

パーリ長部の第 27 経アッガンニヤ経 (*Aggaññasutta*) の起源神話では、野生の稲の出現より前に、三つの神話的な食物の出現が説かれる。三つの神話的な食物の名前は、次のように諸部派の伝承する語形が異なっている：

I. 正量部 *Mahāsamvartanīkathā* (略号 MSK)¹⁾ : (1) *lasā*, (2) *bhū-parpaṭaka*, (3) *vatālatā*;

II. パーリ上座部 *Aggaññasutta* : (1) *rasa-pathavi* (v.l. *rasā pathavi*), (2) *bhūmi-pappaṭaka*, (3) *badālatā* (vv. ll. *padālatā*, *bhaddālatā*) ;

III. 説一切有部 *Saṅghabhedavastu*, etc.²⁾ : (1) *pr̥thivī-rasa*, (2) *pr̥thivī-parpaṭaka*, (3) *vanalatā* ;

IV. 大衆部説出世部 *Mahāvastu*³⁾ : (1) *pr̥thivī-rasa / mahā-pr̥thivī*, (2) *bhūmi-parpaṭaka*, (3) *vanalatā*

本発表では特に第一の神話的な食物の名前について考察したい。

最初の神話的な食物の名について、私たちが従来認めてきた語形は *rasa* という男性名詞であるが、正量部の梵語文献 MSK では *lasā* という女性名詞として伝えられていることに、驚かされる。正量部の MSK に有るこの語形に疑いはない。MSK では 4 箇所 *lasā* の語が繰り返し出てくる⁴⁾。

こうして、この神話的な食物の名前の伝承について、*rasa / lasā* という語形の対立があることが確かめられるが、どちらが本来的な形なのであろうか。正量部の伝承のように、この語が女性名詞であることは、特異な孤立した伝承なのであろうか。そうではないと思われる。というのは、パーリ上座部のアッガンニヤ経テキストの伝承を調べてみると、PTS 版やビルマ第六結集版やタイ王室版の伝承では *rasa-patha (tha) vi* という読みを取っているが、スリランカの伝承では *rasā pathavi* と伝えられていることが判明する。PTS 版や Nālandā 版では脚注にそのスリランカの異読を報告している。

ここにおいて私たちは MSK という 12 世紀のインド正量部の梵語文献が伝える

(98) アッガンニヤ経の神話的食物の名 *lasā / rasā / rasa* (岡 野)

lasā という女性名詞形をきっかけに、パーリ上座部内部においても、*rasa / rasā* という伝承の対立が存在していること、そしてスリランカに伝承される異読 *rasā* が古い正しい読みである可能性があることに気づかされる。正量部の伝承である *lasā* は、パーリ上座部内の一伝承の *rasā* につながる、極めて古い読みであるという仮説を今や検討しなければならない。正量部の母体である犢子部は、有部と同じくらい古く上座部から分出して独立した部派であり、その古い阿舎の伝承を正量部は犢子部から引き継いでいると思われるから、*lasā* という読みの重要性を無視することはできない。この *lasā* が、パーリ上座部内の一伝承の *rasā* と同一起源であるならば、その *rasā / lasā* (女性名詞) の読みは部派分裂以前の Urtext にあった読みである可能性もある。そして *rasa* (男性名詞) の読みは後から生じて後の時代に普及した可能性が出てくる。一般的に判断して *rasā pathavī* は *lectio difficilior* であり、*rasa-pathavī* は *lectio faciliior* である。容易な読みである後者が後に普及したとしても不思議ではない。

この仮説を検討するために、まず、この神話的食物の名についてのパーリ聖典の異読を確認したい。PTS 版 DN III, p. 85 以下にこの食物の名前が出てくるが、p. 85 の箇所では PTS 版は次のように異読の報告を報告する：

rasā pathavī Sct (シンハラ文字写本 Sc と St による異読)
rasāya pathavī Sd (シンハラ文字写本 Sd による異読)

PTS 版 DN の校訂者 Carpenter が報告する異読はこれだけである。これ以外の写本や刊本は、本文テキストにある *rasa-pathavī* という読みなのであろう。

次に Nālandā 版を見ると底本にビルマ第六結集版を用いており、その底本では *rasa-pathavī* の語形であるが、次のように異読を報告する (p. 67)：

rasapathavī Syā^o, Ro^o (タイ版, PTS 版による異読)
rasā pathavī Si^o (スリランカ版による異読)

つまり *rasa-patha (ṭha) vī* の読みには、ビルマ版、PTS 版、タイ版の支持がある⁵⁾。それに対して、*rasāpathavī* の読みを示すのは、スリランカ版である。この Nālandā 版のスリランカ版の異読は Rev. W. Siri Nanavasa Thera (1929) による出版本を用いている。このスリランカの読みの伝承を確認するため、国際仏教学大学院大学にある別のスリランカ版 Buddha Jayanti Tripitaka Series, IX の長部の出版本 (1976 年) を見ると、確かにそのスリランカ伝承特有の読みが、ただ一箇所を除く⁶⁾ 全部の該当箇所において確認された。

ビルマ第六結集版・タイ版・PTS 版の伝承は *rasa-patha (ṭha) vī* という読みを取っ

アッガンニャ経の神話的食物の名 *lasā / rasā / rasa* (岡野) (99)

ているが(なお *pathavī* と *paṭhavi* はどちらも綴りとして間違いでないから, *tha* と *ṭha* の違いは無視し, 以下では *pathavī* で統一する), もし仮に複合語 *rasa-pathavī* の形を認めるなら, それは意味的にやや落ち着きがわるい. 近代語への翻訳者もこの複合語の解釈に苦労している. 有部などの伝承のように, *pathavī-rasa* だったら格限定複合語 (*Tatpuruṣa*) で意味が通ろう. 「地の味 (精粹)」でよい. しかし *rasa-pathavī* という語順では「味 (精粹) の地」(?) になり, どうも腑に落ちない意味となる. そのため, 向井亮のアッガンニャ経の和訳 (『原始仏典 三』講談社) では同格限定複合語 (*Karmadhāraya*) として「ラサなる地」と訳し, Steven Collins (JIP, 23,1993) もこの複合語を同格関係とするが⁷⁾, この意見は正しく, 複合語なら同格に見ざるを得ないであろう. 同格関係ならば, 複合語の前分の *rasā*-は「味 (精粹)」であるより, むしろ固有名詞である可能性が出てくる (*rasā*-の語は形容詞ではありえない). 有部の *prthivī-rasa* よりもパーリの *rasā pathavī* の語順の方が古いと思われるが, 有部が *prthivī-rasa* という逆の語順に変えてしまったわけは, 後の時代にこの *rasā* が固有名詞ではなく「味 (精粹)」の意味で理解されるようになって, 複合語の語順が不自然だと感じたためではないか. そもそもこの複合語が同格関係なら, *rasā-pathavī* でも *pathavī-rasā* でも意味は変わらない. しかし有部は *rasa* 「味 (精粹)」の意味が要求する *Tatpuruṣa* 的解釈によって, 語順を変更する必然性を感じた. 有部に影響されたのか, 大衆部の *Mahāvastu* も *prthivī-rasa* という語順を取る⁸⁾. パーリ上座部と違って, これらの部派においては聖典伝承の梵語化が進められたから, 少し強引に梵語化を行う過程において, 語順の変更がなされたのではないか. つまり *prthivī-rasa* という新しい語順は, 古い伝承の *rasā paṭhavi* の語の理解が困難になった時に, 伝承の「合理化」を進める中で生まれたと説明できる⁹⁾. パーリ伝承形はこの語順変更を行っていないために *Urtext* に近いと思われる¹⁰⁾. パーリ伝承形の語順は, それがもし複合語であるとすれば同格関係で, 前分が固有名詞であることを示唆するが, この推測が正しいなら, そもそも *rasā-pathavī* という複合語形にこだわる必要がないのである. 同格関係で名詞が並んでいるなら, 複合語形にしなくても, 意味に違いはない. ハイフンを取って *rasā pathavī* (ラサーなる地) であってもさしつかえないことになる. なお MSK で *lasā* と *prthivī* との関係が同格と見られていることは, MSK 2.4.2 の *imāṃ prthivīm lasātmām* 「ラサーより成るこの地」という表現から知られる.

rasā-pathavī が本当に複合語か疑わせる最大の根拠はほかならぬアッガンニャ経のテキスト内にみつかるといえる. テキストの或る箇所 (PTS 版, p.86), この複合語の前

(100) アッガンニヤ経の神話的食物の名 *lasā / rasā / rasa* (岡 野)

分と後分が完全に分離した形，すなわち *rasāya pathaviyā* という表現が出てくる。*rasāya pathaviyā* における *rasāya* は *rasā* という女性名詞の斜格 (oblique case) である。女性名詞 *rasā* は梵語で「大地」*die Erde, Land* (ヴェーダ語では「湿気」*Feuchtigkeit*) などの意味で使われる。本来はこの意味であった語が転じて神話的な食物の固有名詞になったのではないか。

なおこの *rasāya pathaviyā* の語形について、PTS 版は異読を報告しており¹¹⁾、*rasāya pathaviyā* と *rasa-pathaviyā* という二つの異読の対立があることがわかるが、PTS 版は正しくも前者の読みを採用している。PTS 版もこの箇所では *rasa-pathavi* という語形をあきらめざるをえなかった。なぜならこの *rasāya pathaviyā* の読みは、ブッダゴーサの長部註 *Sumaṅgalavilāsini* に引用されていることによって確認される (PTS 版 p. 868)。この語形が長部註に引用されているという事実は、聖典テキストの原典批判の上で大きな重みをもつ。それゆえに PTS 版も第六結集版もこの個所では *rasa-pathaviyā* ではなく、*rasāya pathaviyā* の語形を正しいと認めざるをえなかった。しかし、DN の PTS 版や第六結集版が、ここでは *rasāya pathaviyā* を認めつつ、他方では同じテキスト内であるにもかかわらず別の箇所で *rasa-pathavi* という複合語のかたちを採用していることは、態度が首尾一貫していないといわなければならない。長部註の権威によって *rasāya pathaviyā* の語形が正しいと認めるなら、別の箇所にある *rasa-pathavi* という語形も当然ながら疑われるべきであったはずで、その点について校訂者が押し黙っているのはおかしい。一貫性を求めるならば、*rasa-pathavi* ではなくスリランカ写本伝承に従い、*rasā pathavi* と読まなくてはならない。さて、長部註は、*rasāya pathaviyā* について次のように註解を行う：*rasāya pathaviyā* *ti sampanna-rasattā rasā ti laddha-nāmāya pathaviyā*。私の試訳：「*rasāya pathaviyā* とは、味を完全にそなえている故に、ラサー (*rasā*) という名をもつ (*laddha-nāma*) ところの地が、[という意味である].」このブッダゴーサの説明は、神話的食物の名を *rasā* という女性名詞 (の固有名詞) としてパーリ上座部でも古くは伝承していたことの一証拠になろう¹²⁾。この註釈の文を、従来の研究者アッガンニヤ経の近代語の翻訳者や PTSD の編者は不当に無視してきた。

アッガンニヤ経において、*rasā* という女性名詞を認めるなら、うまく説明できることが他にもある。神話的食物が消失した時、人々は *aho rasam aho rasam* と叫んだという (PTS 版, p. 86)。ここでアッガンニヤ経は *rasā* の語に対して男性名詞 *rasa* との通俗語源学的なこじつけを試みていると理解できる。*aho rasa aho rasa* という *voc.* 形ではなく、*aho rasam aho rasam* と表現されている点に注意すべきであ

アッガンニヤ経の神話的食物の名 *lasā / rasā / rasa* (岡野) (101)

る。多くの近代語訳は「ああラサ(味)よ, ああラサ(味)よ」とまるで *voc.* の様に訳すが, それではテキストがなぜ *rasam* という *acc.* 形を使っているのか, その必然性を説明できない。確かに, もしこの語が男性名詞なら, *voc.* で表現すればよいのであって, わざわざ *acc.* 形を取る必要は全く無い。むしろこの *rasam* は, *rasā* の *f.sg.acc.* 形であると見なすべきであろう。「ああ, ラサーを [失った]!」という意味になる。アッガンニヤ経は, 今の時代の人々が美食を得て発する「美味しい」という言葉を説明するため, *rasā* という神話的食物名と, 「味(美味)」の *rasa* という男性名詞の二つの語を, 食物の消失という歴史的な事件における忘れられない悲痛な叫び声を通して, 通俗語源学で結びつけようとした。そもそも, *rasa* と *rasā* の語を連結させる両者の共通点は何であろうか。それは両者ともパーリ語では *sg. acc.* で同じ語形 *rasam* を取ることである。つまり, 性が異なる二つの語の中間に, *rasam* という, *ā* 語幹であっても *a* 語幹であっても同じ形になる共通の *acc.* 形 *-m* を介在させることを経の作者は思いついた。これで女性名詞「ラサー」(*rasā*) から男性名詞「味」(*rasa*) の語が出てきたわけを説明しようとした。つまり経の作者は, *rasā*→*rasam*→*rasaḥ* という展開によって, うまく語を連続させようと意図し, 「味(美味)」を意味する男性名詞 *rasa* が出来るきっかけとなった一つの叫び声にわざと *aho rasam aho rasam* という表現を用いたと理解できよう。「ああ, ラサーを [失った]!」という古の叫びが, 二重義を有する語形を介して, 「ああ, [この] 美味さ(ラサ)を [ご覧]!」という現代人の言葉になったのである。

大地に初めて生じた神話的食物の名が, そもそも *rasa* よりも *rasā/lasā* の方がふさわしいと思われるのは, 大地から生まれたこのゼリー状の物質の名前が, もともと「味」を意味する *rasa* よりも「大地」(古くは「湿気」)を意味する *rasā* の語と関係して生じた可能性が高いからである。この憶測には根拠がある。立世阿毘曇論に, 器世間のこの大地の名前は「大味」とであると説かれている。「此の水輪の上に別に地界あり, 名けて大味という」(大正 32, 224c16)。なぜ大地の名前が「大味」なのか。実はこの「大味」は *mahā-rasā* (偉大な大地)の語をひねって訳したものである。立世阿毘曇論のパーリ語版である *Lokapaññatti* では *mahārasā nāma pathavi* と記されている (ed. E. Denis, I, p. 202, l. 4)。この *mahārasā* の語はアッガンニヤ神話の記事の直前に置かれている。「大味」と漢訳された大地 *mahā-rasā* の語が神話的食物の名 *rasā pathavi* と密接な関係があることは明らかである。つまり私たちは「大地 (*rasā*) から生まれた神話的食物はラサー (*rasā, lasā*) と呼ばれたが, その消失後, 転訛してラサ (*rasa* 味) という言葉が出来た」と理解すべきなのであ

(102) アッガンニャ経の神話的食物の名 *lasā* / *rasā* / *rasa* (岡野)

ろう。

以上述べてきたことから、正量部ばかりでなくパーリ上座部でも、女性名詞 *rasā* / *lasā* が、神話的食物の固有名詞として使われていたと結論してもよいであろう。正量部の伝承では、この固有名詞としての神話的食物の名を普通名詞 *rasā* や *rasa* と混同しないように、この食物の名を *lasā* として伝えたものと理解できる。*rasā* が *lasā* へ異化されたのであろう。パーリ上座部ではそこまで警戒はせずに、本来の語形 *rasā* のままで伝えたために、やがて男性名詞 *rasa* との混同が起こったと思われる。パーリ上座部では、神話的食物が *rasā* という女性名詞であるという知識がブッダゴーサの時代までは伝えられていたものの、その後次第に忘れられてしまい、いつの間にその固有名詞が「味(精粹)」を意味する男性名詞 *rasa* として理解されるようになり、その結果ビルマやタイでは *rasa-pathavi* という誤った語形の伝承が正しいと認められるようになったのであろう。それが女性名詞であることの知識が失われた時から、*rasā* と *rasa* との混同は当然のなりゆきであったといえる。アッガンニャ経では「美味だ」という今日の感嘆の表現として男性名詞 *rasa* が使われるから、その語が前に置かれた神話的食物名にすりかわってしまうのは、誤り方として自然である。また *rasā* の語が有る同じ段落内に *rasa-sampannā* 「味をそなえたる」という表現が出てくるので、つい男性名詞 *rasa* に解釈が引張られてしまうのは無理もないことである。

この経における *rasā* と *rasa* の混同は経の内容からじつに自然に起こりうるものであった。それ故に、その誤解の歴史をたぐってゆくと、この混同の問題は相当根深く、広く、古くまで行くように思われる。上述のように有部や大衆部説出世部は、語順を *prthivi-rasa* と変更し、*Tatpuruṣa* としての理解における「味(精粹)」という解釈を正当化してしまったように思われる。この書き換えはそれらの部派だけではなかったかもしれない。多くの漢訳経典が、この神話的食物名を「味」と訳していることは、その解釈が相当に普及していたことを示す¹³⁾。ただし、すべての漢訳が一律に *rasa*(味) という解釈を取っているわけではない。例えば増一阿含の七日品第四十之一では「地肥」と訳されている(大正2,737a)。

つまり、神話的食物が *rasā* / *lasā* という女性名詞である知識が失われる現象が起こったのは、パーリ上座部ばかりではなかった。インド亜大陸の諸部派間に起こった *prthivi-rasa* という新解釈がいつしかスリランカの聖典伝承にも影響を与えたのかもしれない。しかしパーリ上座部でも後の時代に *rasa-pathavi* の複合語形の伝承が普及したといっても、原典批判の原則からいって、*rasā pathavi* というスリ

アッガンニヤ経の神話的食物の名 *lasā / rasā / rasa* (岡野) (103)

ランカの異読がより古いと判明すれば、現在普及している読みは捨てられるべきである。パーリ上座部の第六結集版や PTS 版の *rasa-pathavi* の読みは訂正されるべきである。つまり次のようにパーリ聖典の訂正の提案を行いたい：

[提案:] パーリのアッガンニヤ経の PTS 版テキスト pp. 85-87, 90-91 で、nom. 格の語形 *rasa-pathavi* が 4 箇所に出てくるが、スリランカの伝承に基づいてすべての箇所で *rasā pathavi* と訂正されるべきである。また 11 箇所ある acc. 格の語形 *rasa-pathavi* もすべて *rasaṃ pathaviṃ* と訂正されるべきである (つまり Buddha Jayanti 版のとおり読む)。pathavi / pathavi の違いは問題にしない。この読みの訂正により、神話的な食物名は、従来の近代語訳が訳すように「ラサ」や「味」ではなく、「ラサー」と訳されるべきである。

- 1) K. Okano: *Sarvarakṣitas Mahāsamvartanikathā*. Sendai, 1998. pp. 193 ff.
- 2) *Saṅghabhedavastu*, ed. R. Gnoli, I, pp. 7-10; Waldschmidt: *Kleine Schriften*, pp. 292 ff. (なお *Abhidharmakośa-bhāṣya*, III, 98 では *bhūmi-rasa* と表現.)
- 3) *Mahāvastu*, ed. E. Senart, I, pp. 339-341, 344-345.
- 4) MSK 2.4.2, 3.1.1, 3.1.2, 3.1.26 の 4 偈に、*lasā* の語が出てくる。
- 5) 九州大学所蔵のタイ王室版を確認しても、やはり *rasa-pathavi* である。
- 6) 例外的に一箇所だけ (III, p. 152, l. 27), acc. 格の箇所で、スリランカ伝承特有の *rasaṃ pathaviṃ* の形ではなく *rasa-pathaviṃ* の複合語の形が出てくる (その箇所は PTS 版の p. 90, l. 25 *rasa-pathaviṃ* にあたる)。これは誤りである。
- 7) Steven Collins (JIP, 21 (1993), p. 357) は Karmadhāraya の可能性の他に、Tatpuruṣa の *pūrva-nipāta* の可能性もあるとしているが、後者は疑わしい。
- 8) ただし *Mahāvastu* (I, 339.7) では、*mahā-prthivi* という語が、*prthivi-rasa* と同じ意味で、最初に語られる。そして I, 339.8 で、*sā cābhūd varṇasaṃpannā rāsasaṃpannā [...]* という、神話的食物 *rasa* の説明であるはずの文に、*rasa* の語はなく、代名詞女性形 *sā* が主語として出てくることに注意：「それ (女性単数) は色をそなえ、味をそなえ [...]」。この *sā* は前文にある *mahā-prthivi* を意味する。この *mahā-prthivi* の語は本来の *rasā prthivi* / *lasā prthivi* という表現が形を変えたものである可能性を私たちは大いに疑ってよい。このように *Mahāvastu* には神話的食物が女性名詞として表現されていた古い時代の痕跡が明確に認められる。後から男性名詞 *rasa* の解釈が入り込み、結果的に同一テキスト内に相異なる伝承が並立した。
- 9) 第三の神話的な食物の名前に関して、パーリ上座部の *badālatā*、正量部の *vatālatā*、有部の *vanalatā*、大衆部説出世部の *vanalatā* を比較すると、前二者は俗語的であるが、後二者は俗語の「梵語化」の結果として出来た可能性が高い。それと同性質の「梵語化」の変更が、*lasā / rasā / rasa* の読みについても起こったと指摘できる。
- 10) ただし本来パーリ上座部に属する文献ではない中世のパーリ語文献 *Lokapaññatti* では (Denis, I, 204-211), *rasa-pathavi* (or *-pathaviṃ*) の語形が七箇所、*pathavi-rasaṃ* の語

(104) アッガンニヤ経の神話的食物の名 lasā / rasā / rasa (岡野)

形が四箇所、互いに入り交じって出現する。ここでも同一テキスト内に相異なる伝承が奇妙にも並立しているわけである。そのうち一箇所では pathavi-rasā という女性形で現われる (I, 211, note 3).

- 11) PTS 版 p.86 の脚注 10 を参照。Sdt の rasā pathaviyā という異読は、単に rasāya pathaviyā の書き誤りであると理解される。
- 12) ただしブッダゴーサの *Visuddhimagga* では、rasa-pathavi の語が使われており、それに対して H. C. Warren 校訂本 (1950) では異読は報告されていない (p. 353)。また rasa-pathavi の複合語はティーカー (復註) 文献にもかなり沢山見つかる。このことからブッダゴーサ以後の時代には rasa-pathavi の読み方がパーリ上座部全体で支配的になっていったと推測することが出来る。
- 13) 上記のブッダゴーサの長部註の説明文から、rasā を rasa と同一語源に扱う解釈が感じられる。ブッダゴーサは rasa の語が「味」の意味を変えないままで女性の固有名詞になり、rasā という語が生じたと考えているように思われる。つまり男性名詞から意味上の変化はなく女性名詞が作られたと見なすわけである。この解釈に立つなら、rasā の語を「味」と漢訳しても誤訳ではないことになる。

〈キーワード〉 Aggaññasutta, Mahāsaṃvartanīkathā, rasā, lasā, 正量部

(九州大学助教授, Ph. D.)

掲載されなかった諸氏の発表題目 (1)

ウルドゥー語に於ける性別差

荻田 博 (東京外大)

ボージャ王著作における文学理論の一特集

本田 義央 (広島大)

バクトリア語仏典について

吉田 豊 (神戸市外大)